

# 山ノ井南野遺跡

福岡県筑後市大字山ノ井所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

第56集

2004

筑後市教育委員会

やまのいみなみのいせき  
山ノ井南野遺跡

2004

筑後市教育委員会

## 序

この報告書は、宅地分譲に伴い平成14年度に筑後市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

当遺跡は、筑後市中央部のやや南東よりに位置し、標高15m位の低地上にあります。周辺には、これまでの発掘調査などによって多くの遺跡が点在していることが知られており、古代の官道である「西海道」は当調査地の西端を縦断していたことが想定されています。調査の結果、当遺跡からも古代の遺構や遺物が確認され、新たな資料を加えることができました。

本報告書が地域における文化財保護思想普及の一助として、また、学術研究の資料としてひろく活用されることになれば幸いと存じます。

おわりに、本報告書の刊行にあたり、発掘調査から整理報告に至るまで、多大なご協力を頂きました関係者並びに作業参加の方々に厚くお礼申し上げます。

平成16年3月

筑後市教育委員会  
教育長 城戸一男

## 例　言

1. 本書は宅地分譲の工事に伴い、フジホーム株式会社の委託を受けて、筑後市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行い、出土遺物・図面・写真等は筑後市教育委員会において所蔵・保管をしている。なお、発掘調査並びに整理作業の関係者は「I. 調査経過と組織」に記したとおりである。
3. 調査に用いた測量座標は国土調査法第II座標系を基準としているため、本書に示される方位はすべてG.N.（座標北）を示し、本文中に記される遺構の角度はこれを基準としたものである。また、水準はT.P.を基準としている。
4. 本書に使用した図面のうち、遺構実測図は柴田剛、遺物実測図は仲文恵が作成し、図版の添書は横井理絵が行った。
5. 本書に使用した写真的うち、遺構は柴田、遺物は小林が撮影した。また、遺構の全体写真撮影は有限会社空中写真企画に委託した。
6. 本書に使用した遺構番号で、遺構の種別記号は「SD—溝」「SP—ビット」「SX—不明遺構」で表示し、種別記号の前に記した数字は調査次数を表わす。
7. 本書は、柴田監修のもと執筆と編集は小林が行った。

## 目　次

I. 調査経過と組織	1
II. 位置と環境	2
III. 調査成果	5
(1) はじめに	5
(2) 検出遺構	5
(3) 出土遺物	7
IV. まとめ	10

## I. 調査経過と組織

平成14年8月29日に宅地分譲を計画されたフジホーム株式会社から工事によって破壊される恐れのある埋蔵文化財の取り扱いについて筑後市教育委員会へ照会があった。これを受けた筑後市教育委員会では、工事着手前の平成14年9月5日～同年9月19日（10日間）に試掘調査を実施し、その結果をもとに協議を行った。協議の結果、埋蔵文化財が確認された場所において掘削・削平の及ぶ箇所について平成14年度に発掘調査を実施し、翌15年度に発掘調査の整理作業を実施することで合意した。発掘調査は平成14年10月10日～同年11月29日まで実施し、整理作業等は平成15年度に行なった。なお、埋蔵文化財発掘調査に係る費用はフジホーム株式会社において負担された。

### 調査組織

#### 1. 平成14年度体制（発掘調査）

総括 教育長	牟田口和良
教育部長	下川 雅晴
庶務 社会教育課長	松永盛四郎
文化係長	成清 平和
文化係	永見 秀徳
	小林 勇作
	上村 英士
	柴田 刚（嘱託：調査担当）
	立石 真二（嘱託）

#### 発掘調査参加者（順不同、敬称略）

発掘作業員	池末 桂子・井上むつ子・牛島 蓉子・内野 康隆・加藤 礼子 下川 義文・角 里子・瀬戸八重子・田島ヤス子・田島 好江 鶴 カズヨ・中村 三男・馬場千鶴子・平島 廉子・深町 泰代 溝川香代子・森山美津子
-------	---

#### 3. 平成15年度体制（報告書作成）

総括 教育長	牟田口和良
教育部長	城戸 一男
庶務 社会教育課長	菰原 修
文化スポーツ係長	松永盛四郎
文化係 主査	成清 平和
文化係	大島 靖彦
	田中 純彦
	永見 秀徳
	小林 勇作（整理担当）
	上村 英士
	立石 真二（嘱託）

#### 整理作業参加者（順不同、敬称略）

整理補助員	平塚あけみ・仲 文恵
整理作業員	妹川 玲子・佐々木寿代・野間口靖子・野口 晴香・湯川 琴美 横井 理絵

## II. 位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部にある。市域をJR鹿児島本線と国道209号線が縦断し、国道442号線が横断する。また、市南西部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畠、東部や南西部では米麦を中心の田園地帯が広がる。市街地は、国道に沿って市の中心部に形成されている。

今回報告する山ノ井南野遺跡は市中央部の南東よりに位置し、標高15m位の低地に立地する。周辺には縄文時代の落とし穴が確認された「長浜鍾遺跡」や中世の流路が確認された「徳久中牟田遺跡」等が点在しているが当遺跡の西隣を古代の道路が南北方向に貫通していたことが知られている。古代の道路とは外交や国防の要地として大宰府に統括された西海道の駅路のことであり、筑後～肥後国府間に配されていた「葛野駅」は現在の大字羽犬塚字丑ノマヤ付近に想定されている。古代道路に間連する周辺遺跡は「羽犬塚山ノ前遺跡」や「山ノ井川口遺跡」等が著名であるが、奈良～平安時代を主体とした「羽犬塚中道遺跡」、「羽犬塚射場ノ本遺跡」、「羽犬塚中道遺跡」等が集中して確認されている。

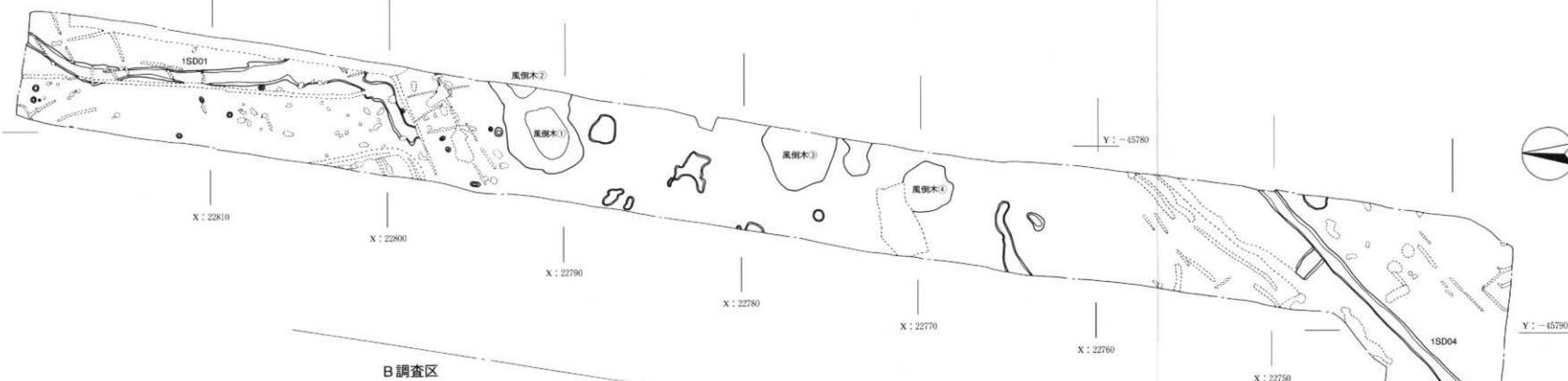
### 【参考文献】

- 『筑後市史—第1巻一』 筑後市 (平成9年)  
『徳久中牟田遺跡』 筑後市文化財調査報告書 第19集 筑後市教育委員会 (1999)  
『筑後市内道路群IV』 筑後市文化財調査報告書 第45集 筑後市教育委員会 (2002)

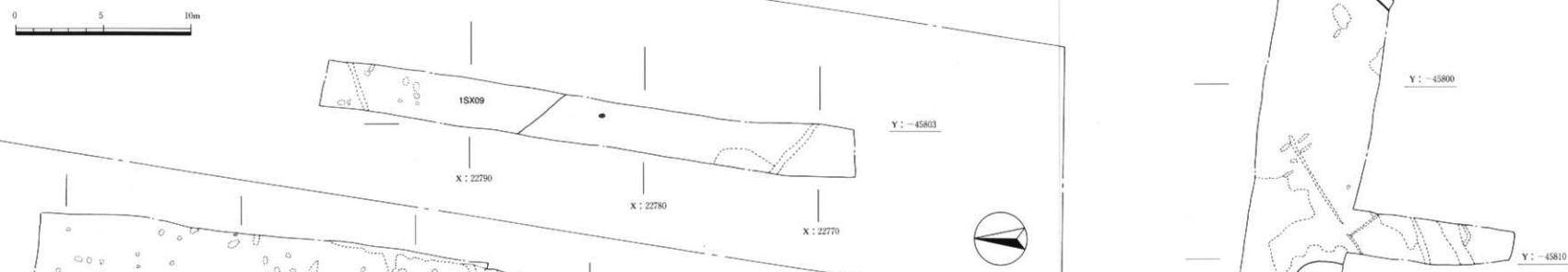


Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

A調査区



B調査区



C調査区

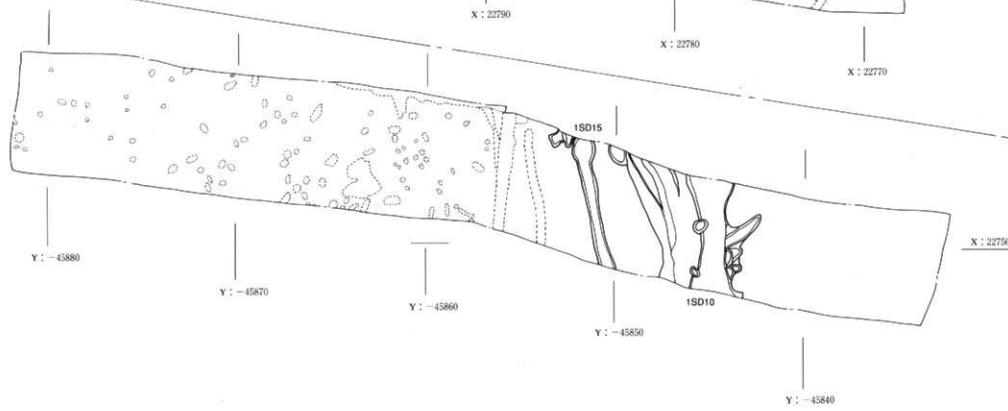


Fig.2 山ノ井南野遺跡遺構全体実測図 (1/200)

### III. 調査成果

#### (1) はじめに (Fig. 3)

当遺跡は筑後市大字山ノ井字南野688—3外に所在し、標高15m位の低地上にある。

フジホーム株式会社からの依頼を受けて筑後市教育委員会が実施した宅地分譲に伴う発掘調査で、今回は新設の道路及び排水路の設置予定箇所を調査対象範囲とした。このことにより調査区は3箇所となったため、便宜上、東部分を「A調査区」、中央部分を「B調査区」、西部分を「C調査区」と設定した。調査面積は約1,500m<sup>2</sup>で発掘調査は平成14年10月10日～同年11月29日まで実施し、この間重機による表土除去（有限会社徳光建設に委託）、遺構検出、掘削、実測、写真撮影等の作業を行った。調査の結果、溝、土坑、ピット等の遺構が確認され、繩文土器・須恵器・土師器・瓦器等の遺物を得ることができた。発掘調査は柴田剛（現：伊万里市教委）が担当し、遺物等の整理作業と報告書作成業務は小林勇作が担当して平成15年度に行った。

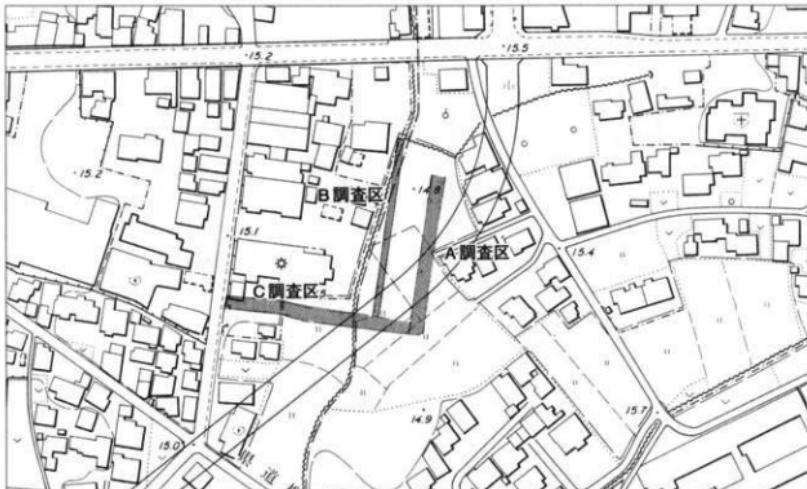


Fig. 3 調査地点位置図 (1/2,500)

#### (2) 検出遺構

溝

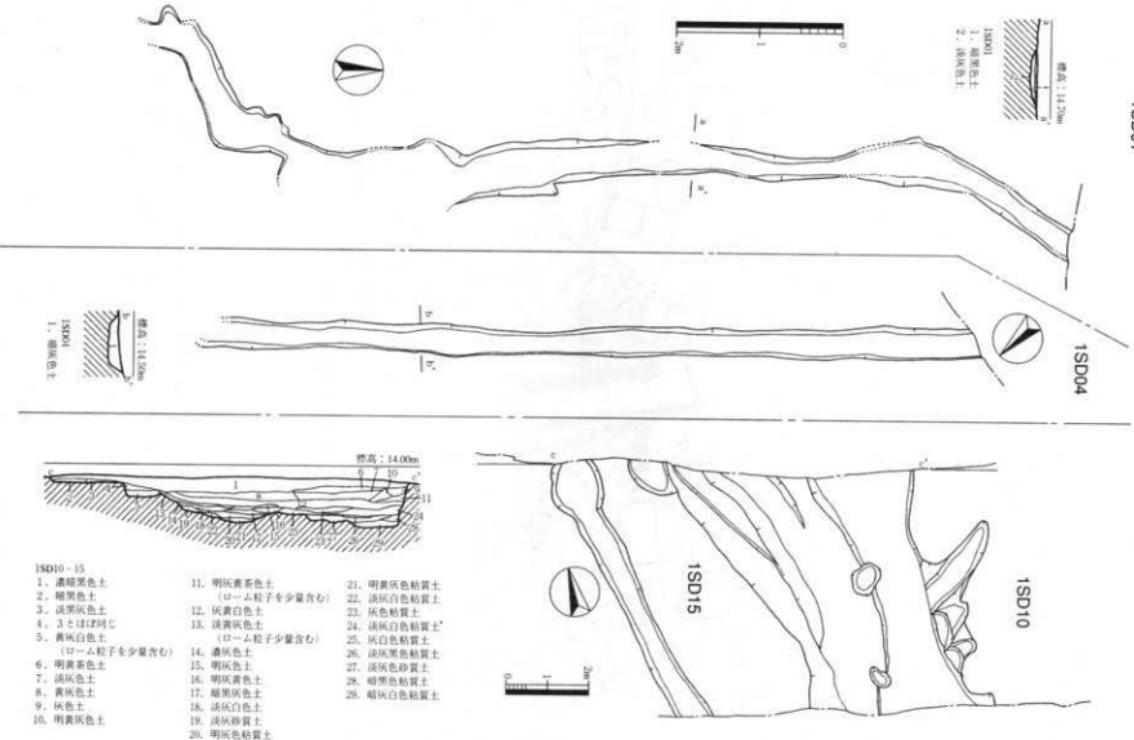
##### 1SD01 (Fig. 2・4)

A調査区の北部で確認された南北溝で長さ約24m分を検出した。溝は現代の暗渠排水による擾乱と削平を著しく受けたために残存状況は極めて悪い。幅0.50～1.30m、残存高0.10m程度を測り、埋土は上層で暗黒色土、下層で淡灰黒色土の2層が確認された。埋土中からは土師器（片）、磁器（片）が出土した。

##### 1SD04 (Fig. 2・4)

A調査区の南部で確認された北東—南西方向の溝ではほぼ直線状に延びる。溝の両端は調査区外へ展開し、長さ約46m分を検出した。幅0.26～0.42m、残存高0.15m前後を測り、溝底はほぼフラットな状態で確認された。埋土は暗灰色土で遺物は土師器（片）、染付（片）、陶器（擂鉢）が出土した。

Fig. 4 溝 (1SD01・04・10・15) 実測図 (1/60・1/120)



### 1SD10・15 (Fig. 2・4, Pla. 1・2)

1SD10はC調査区の東部で確認し、長さは約6m分を検出した。幅3.75m以上、残存高0.85~1.15mを測る南北方向の溝で両岸は不安定な状況を呈し、溝底面からはピットも確認されている。埋土は砂質土や粘質土が混在して発達している状況から流水と溜水が繰り返されていたことが想定される。また溝の底面では南北方向に掘り込まれた数条の溝の痕跡が認められる。土層観察において溝の単位を捉えることができ、古い順に1段階目(27~29)、2段階目(23~26)、3段階目(13~22)、4段階目(8~12)、5段階目(6・7)、6段階目(4・5)、7段階目(2・3)、8段階目(1)と埋没過程を追うことができる。このうち7段階目の堆積土は1SD15の埋土にあたる。1SD15はC調査区の中央部で検出した南北溝で長さ約6.8m分を検出した。幅0.55~0.85m、残存高0.10m程度を測り、溝の北端は梢円状に膨らんだ状態で検出された。出土遺物について、1SD10からは土師器(蓋・壺・小型壺・高壺・甕)、白磁(碗)、1SD15からは須恵器(壺)、土師器(片)、瓦器(碗)が認められている。

### その他の遺構

#### 不明遺構

### 1SX09 (Fig. 2)

B調査区の北端で確認した溜まり状の遺構で底面は不安定な状況を呈する。埋土は黒色土を主とし、縄文土器(鉢)、須恵器(片)の出土遺物が認められている。

### 風倒木群 (Fig. 2・5, Pla. 2)

A調査区からは5箇所で風倒木痕が検出され、各々の平面プランは不定形なものであった。この内のひとつである北端の風倒木①を断ち割ったところ、埋土は平面プランの中心部下位に向かって堆積していた。この状況は樹木の生息期にもたらした1. 地山跳ね上げによる堆積土、2. 倒木後に流入した堆積土によるものと考えられる。風倒木①は幅約3.7m、風倒木②は計測不能、風倒木③は幅約4.0m、風倒木④は幅約2.8m、風倒木⑤は幅7.0m以上を測る。

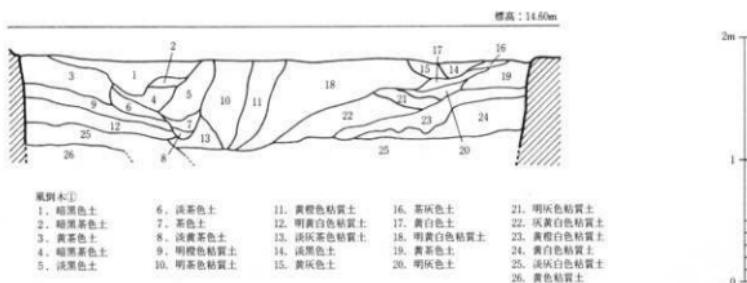


Fig. 5 風倒木①土層断面実測図 (1/40)

### (3) 出土遺物

#### 溝

### 1SD10 (Fig. 6, Pla. 3)

#### 土師器

蓋(1) 口径11.25cm、器高3.00cmを復原する。かえりのある口縁部を呈し、天井部にはヘラ記号のような引っかけ痕が認められる。天井部外面はヘラケズリ、その他の調整はヨコナデである。色調は外側が赤茶褐色、内側が淡黄茶色を呈し、胎土は2mm以下の細砂粒を含む。焼成はほぼ良好である。

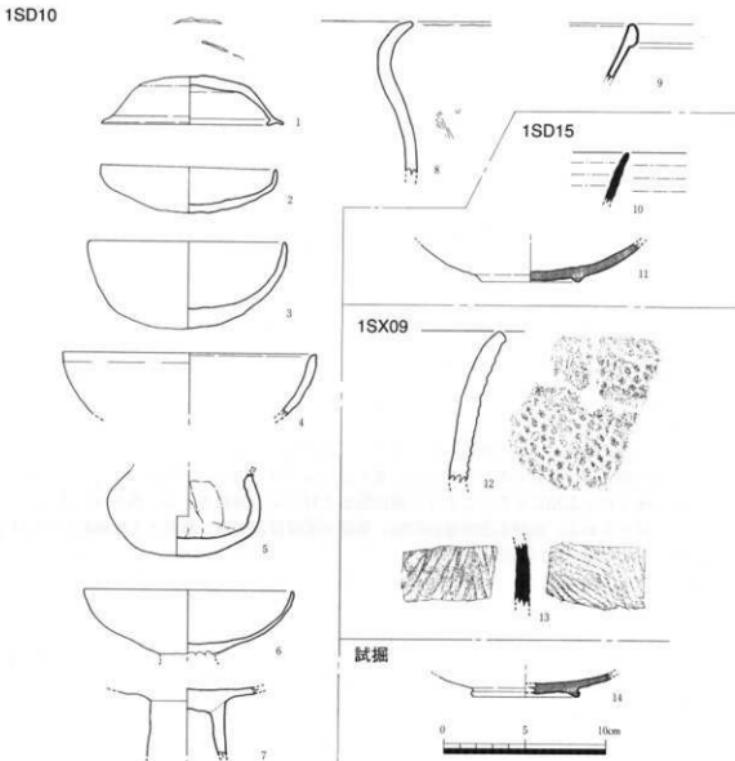


Fig. 6 山ノ井南野遺跡出土土器実測図 (1/3)

壺（2～4） 2はほぼ完形で口径は10.85cm、器高は2.80cmを測るが器面は激しく磨耗しており調整不明である。色調は外面が明茶褐色、内面が暗茶褐色で胎土は2mm以下の細砂粒を含む。3は口径12.20cm、器高5.35cmを測る。底部は肥厚しており口縁部内面はヨコナデである。その他は磨耗のため調整不明で色調は淡灰黄色を呈する。胎土は1mm以下の細砂粒を含み、焼成はやや不良である。4は口径15.60cm、器高3.80cmを復原し、口縁端部外面はやや凹状気味につまみだされている。色調は淡茶灰色を呈し、胎土は1mm以下の細砂粒を含む。焼成はほぼ良好であるが磨耗のため調整不明である。

小型丸底壺（5） 底部の細片で内外面はナデの調整である。色調は淡灰茶色を呈し、胎土は1mm以下の細砂粒を含む。焼成は不良である。

高壺（6・7） 6は口径12.90cm、杯部の器高は4.00cmを測り、器面は激しい磨耗により調整不明である。色調は淡赤茶色を呈し、胎土は1mm以下の細砂粒と赤色粒子を含む。7は杯部と脚部の接合部で胎土は1mm以下の細砂粒を含む。色調は明黄茶色を呈し、焼成は不良である。

壺（8） 肩部から口縁部にかけては大きく外反する。器面は激しく磨耗し調整不明であるが体部外部の一部で刷毛目調整が認められる。色調は淡灰黄色を呈し、胎土は3mm以下の細砂粒を多く含む。

## 白磁

椀（9） 口縁部が玉縁状を呈した細片で淡灰色の素地に淡乳灰白色の透明釉を内外面に施す。横田・森田分類—IV類。

1SD015 (Fig. 6 , Pla. 3)

## 須恵器

壺（10） 口縁部の細片で内外面はヨコナデ調整である。口縁部はほぼ直線的に立ち上がるが若干外反する。色調は暗灰色を呈し、胎土は精選されている。焼成は還元炎焼成で良好である。

## 瓦器

椀（11） 底部の細片で高台径は6.00cmを復原する。高台部はヨコナデ、内面はナデの調整で色調は明灰色を呈する。胎土は精選され、焼成はやや不良である。

## その他の遺構

### 不明遺構

1SX09 (Fig. 6 , Pla. 3)

## 縄文土器

鉢（12） 口縁部の細片でやや外反する。外面と口縁部内面には大型の楕円押型文が施され、胎土は細砂粒、角閃石、雲母を多く含む。色調は外面が黄茶褐色、内面が明灰茶色を呈し焼成はやや不良である。

## 須恵器

甕（13） 器厚は0.8cm前後を測り、内外面には平行叩き文が施される。胎土は砂粒を多く含み、暗灰色の還元炎焼成である。

試掘採集 (Fig. 6 , Pla. 3)

## 瓦器

椀（14） 底部の細片で高台径は6.50cmを復原する。外方へ踏ん張った高台が貼り付けられており、調整は磨耗のため不明である。胎土は精良で色調は暗灰色を呈する。

### 【参考文献】

横田賢次郎・森田勉 「大宰府出土の輸入陶磁器について」 『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館 1978



発掘調査作業参加者

## IV. まとめ

先述したように調査区内は近年の耕作等によって全体的に掘削や削平を受けていたが、溝4条、不明遺構1基、風倒木痕5基が確認されるなど当遺跡における新たな資料を追加することができた。以下は検出遺構について再度概観してまとめとしたい。

### (1) 溝について

1SD01はA調査区の北側で確認した蛇行溝であり、残存状態からは自然発生的なものであった可能性が考えられる。出土遺物が乏しく時期を特定できていない。1SD04は遺存状態のしっかりとした直線的に延びる溝で耕作時に使用されていた用排水路若しくは土地の境界を示す区画溝として存在していた可能性が考えられる。染付片・陶器片が出土しており最終埋没は近世以降と思われる。C調査区東側の1SD10は数条の溝が重複して確認された溝であり、この状況は遺構検出と土層断面からも観察することができた。大別すると8段階で溝の掘り直しが行われていることが予想でき、1SD10の西側で確認された1SD15もそのひとつと考えられる。出土遺物は各層から散在的に認められているものの現段階での相対性は不明であり時期を特定することはできない。全体的には7~8C前半の土器が多く含まれており、僅かではあるが中世の遺物も含まれている。7段階目の埋没と捉えられる1SD15からは瓦器碗を認めており最終埋没は13C代と考えておきたい。

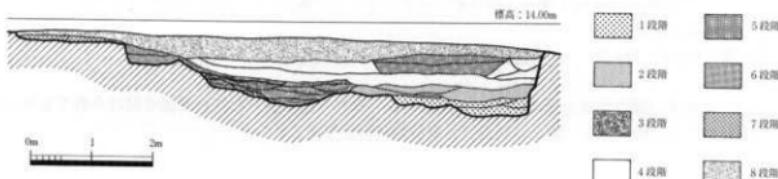


Fig. 7 溝 (1SD10・15) 埋没過程状況図 (1/80)

### (2) 他の遺構

B調査区の北端で確認した溜まり状遺構の1SX09からは縄文早期の押型文土器が認められた。当遺跡周辺では東方約700m地点の「長浜鎧遺跡」において縄文時代の落とし穴が確認されているだけでこれまで詳細な部分については不明であったが、今回の出土によって周辺に存在する可能性は一段と高くなつた。

A調査区で確認された風倒木群については時期を示す資料を得ることはなかったが、検出状況において樹木の生息期にもたらす地山跳ね上げ土と倒木後に流入する堆積土との関係を記録することができたことは成果であった。

### (3) おわりに

当調査区の西端には調査当初から古代官道である「西海道」が南北に貫通することが知られていた。先述したように今回の調査成果からはその関連について言及することはできなかつたが、調査の積み重ねによって何れ明らかになるであろう。今後の調査に期待したい。

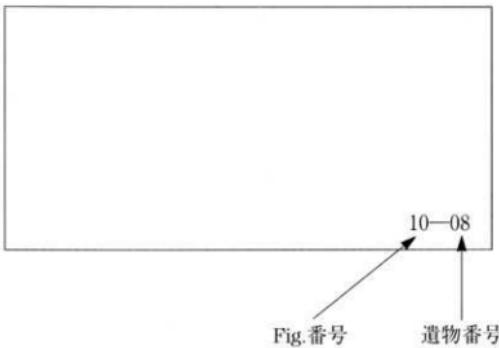
#### 【参考文献】

「長浜鎧遺跡」 「筑後市内道路群Ⅱ」 筑後市文化財調査報告書第33集 筑後市教育委員会 2001

# PLATE

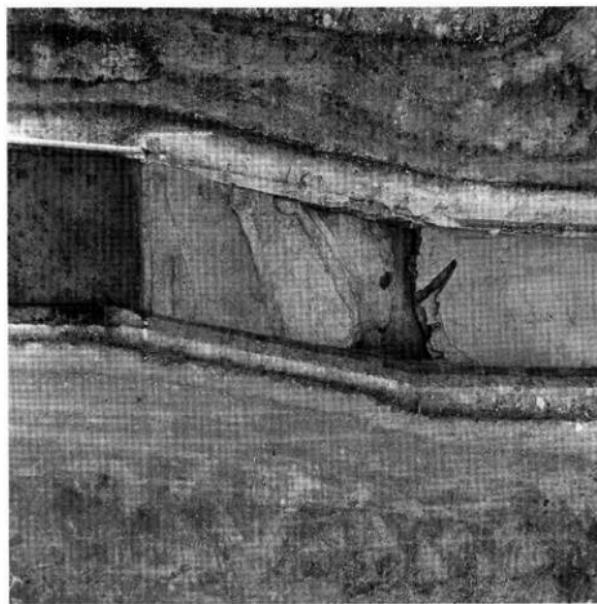
## 凡 例

遺物の写真右下の番号は、以下のとおりである。

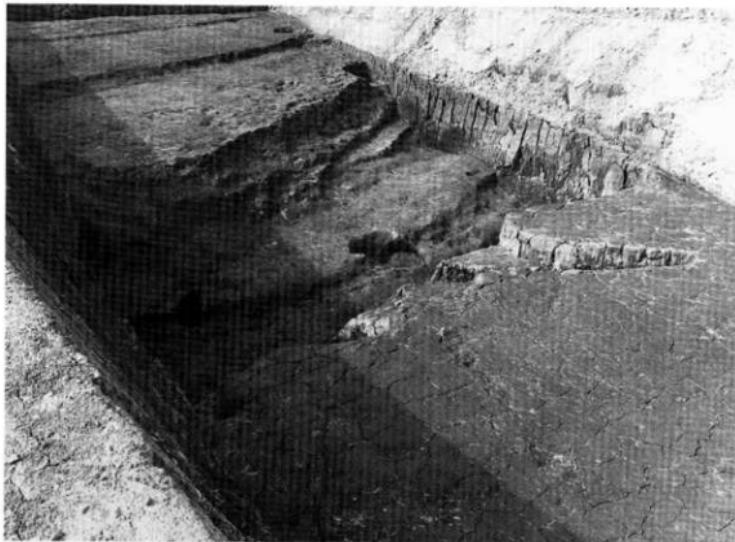




調査区遠景  
(南から：空中写真)



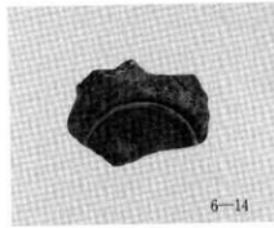
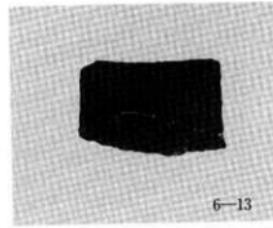
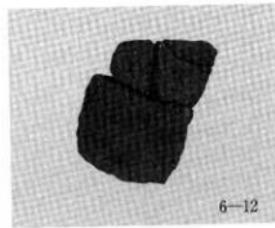
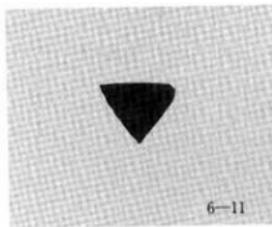
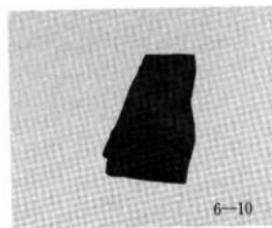
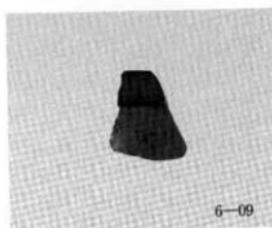
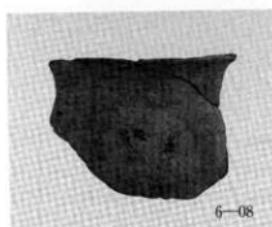
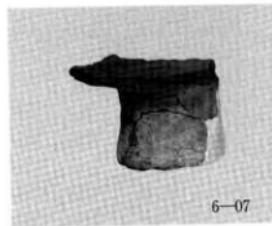
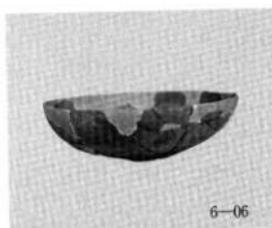
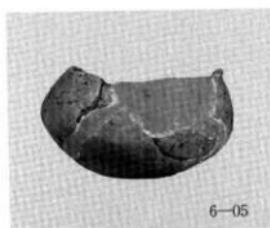
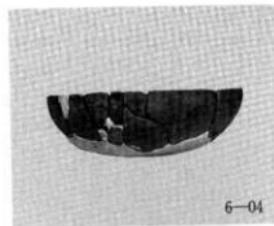
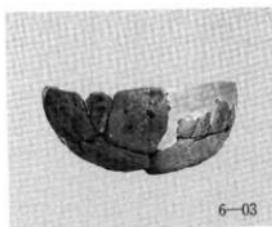
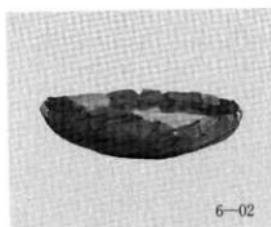
1SD10  
(上が北：空中写真)



1SD10 (南東から)



風倒木①土層断面状況 (西から)



山ノ井南野遺跡  
筑後市文化財調査報告書  
第56集  
平成16年3月31日  
発行 筑後市教育委員会  
福岡県筑後市大字山ノ井898  
印刷 有限会社 新幸印刷  
福岡県三井郡北野町富多121-9